

困難とどう向き合うのか？

ー陸前高田のまちづくりからー

早稲田大学人間科学部健康福祉科学科

庄司迪太郎

はじめに

私は静岡県裾野市で生まれ、大学に進学するまで所謂「田舎」で暮らしていた。静岡の田舎から早稲田大学に進学し、最初に驚いたのは、非常に多くの人が首都圏出身であるということだった。実家暮らしの同級生も沢山いた。そんな同級生と関わる中で、自分が地方出身であるということを改めて自覚するタイミングは多く、地方出身であることは次第に自分の中のアイデンティティの一部になっていった。そんな中、大学にも慣れ、1年が終わりそうになった頃、能登半島地震が発生した。

2024年1月1日、能登半島地震が発生した。マグニチュードは7.6、最大震度は輪島市と志賀町で震度7が観測された。私は能登半島や北陸に親戚、知り合い等はいなかったが、それでも被災の状況などをテレビの映像を通して見ながら、他人事とは思えなかった。なぜなら、私の地元には、南海トラフ巨大地震が来ると子どもの頃から言われていたからだ。出身地である静岡県裾野市は富士山の麓に位置し、高校は駿河湾に面した沼津市の高校に通っていた。そのため、富士山や駿河湾は自分にとっての原風景であるのだが、普段は穏やかな駿河湾も南海トラフに位置し、私の地元は南海トラフ巨大地震の被害にあうとされている。早稲田大学に進学し、地元というものについて改めて考えていた時に能登半島地震が発生したことで、それ以降、災害と、地方全体の問題である人口減少について強い関心を持つようになった。能登半島地震のボランティアにも2回行き、被災地にも実際に足を運んだ。その頃、2年次の履修を組む時期になり、たまたま本講義「東日本大震災のフィールドワーク」を見つけた。そしてこの講義が、陸前高田市にフィールドワークに行き、自身の興味関心に合わせて現地でインタビューを行い、レポートにまとめる講義であることを知った。

この講義を履修することで、東日本大震災から13年経った陸前高田の復興のリアルを知り、陸前高田の現在地を知ることができるのではないかと考えた。加えて、被災直後の能登との対比や自分の地元との対比を通して災害と地方について考えを深めることができるのではないかと考えた。

私にとって、震災から13年経った東北の現在を見ることも、能登の現在を見て能登の未来を考えることもどちらも、私の故郷にいずれ訪れる可能性のある未来を考えるということだった。そのため、この講義を履修し、陸前高田市の今までと現在について自分なりに向

き合いたいと思った。これが、私が本講義を履修した経緯である。

1. 本研究の問い

本研究では、初めに、「復興に取り組んでいる人たちは、これからますます街の人口が減っていくという事実、どう向き合っているのか、その事実についてどう考えているのか」という問いを立て、現地に向かった。

本講義を履修した経緯でも少し触れたが、私の関心の中心は主に地方の（日本の）人口減少、自然災害、災害からの復興、まちづくり、地方創生である。一言でまとめるなら「日本の地方が直面している困難と地方創生について」、とまとめられるかもしれない。大学に入学してから、地方出身というアイデンティティが育まれていく中で、将来は地元や地方のために何かできたらいいなと漠然と思うようになっていた。しかし、そのような将来を構想したり、地方について勉強をしたりする際に感じるのは、ほのかな絶望感や無力感であった。この絶望感や無力感というのは、私自身が感じたものでもあるが、それだけでなく、「地方の未来」というものに対する社会全体の見方が纏っているものでもあった。地元のために何かしたいとは言っても、人口が減少して街が成立しなくなったら、縮小していったら元も子もないじゃないか、という考えが自分の中で強くなっていた。

今回のフィールドワークとインタビューを通して向き合う問いを立てる際に、純粹に、まちづくりに取り組む人は人口減少についてどう思っているのか、疑問に思った。私から見ると、現在まちづくりに取り組んでいる人は「まちづくりは今とその延長上の未来のための行為であるが、その未来には人口減少という個人ではどうしようもない困難が待ち受けている」という構造の中に見えるのである。その構造の中でどうして未来のための行為であるまちづくりをしようと思えるのか。また、そもそも人口減少をどう捉えているのか、ということを知りたいと思った。そのため、「復興に取り組んでいる人たちは、これからますます街の人口が減っていくという事実、どう向き合っているのか、その事実についてどう考えているのか」という問いを設定した。

しかし、結果の章でも述べるように、私はこの問いが本当に問いたいものであるという実感がなかった。この問いはとても表層的な部分の問題意識が元になっているにすぎず、本当に問いたいことが別にあるような気がしていた。そんな中、問い自体を疑いながら陸前高田でのフィールドワークとインタビューを実施し、陸前高田での経験を振り返り、整理するという作業を行なった。その結果、私が本当に聞いたかったこと、答えを知りたかったことが何なのかが私の中で明らかになっていった。

2. 先行研究

佐藤滋編『東日本大震災からの復興まちづくり』（2011）を先行研究とした。その中でも

特に、佐藤が執筆した「東日本大震災の意味と復興まちづくりの方法」を取り上げる。この研究では、東日本大震災という災害の特徴を7つ挙げ、その後、復興していくにあたってどのような時代背景であるか、それらの特徴と時代背景を踏まえ、どのような復興まちづくりを行なっていくべきかについて論じている。

この研究の中で挙げられていた東日本大震災の特徴の中でも本レポートの内容から特筆すべきは、特徴⑤「『縮退』を前提とした復興」である。具体的な制約としては、公共投資が限られること、人口減少を見越したまちづくりを行う必要があることを指摘し、それらを乗り越える方法として、行政のトップダウン式のまちづくりではなく、地域住民を含めたボトムアップ式のまちづくりを、NPO や社会的企業といった「新たな公共」セクターの力を生かしながら進めていくべきであるということを主張している。これは、実際に陸前高田でも官民一体のまちづくりが行われ今の街があることなどから、まちづくりの方向性としては有効なものであったように思われる。しかしこの研究では狭義の復興が指す 0 から 1 のまちづくりのことしか触れられておらず、震災から 13 年経過した被災地の指針とはならないものである。

3. 調査の概要

本レポートでは、株式会社東京屋社長兼、高田まちなか会 2 代目会長、小笠原修さんにお話を聞いた。高田まちなか会とは、陸前高田市の中心市街地の事業者団体であり、小笠原さんのお店である東京屋カフェも JR 陸前高田駅とアバッセたかたという中心商業施設からそれぞれ徒歩 3 分程度のところにある。小笠原さんはまちなか会発足時から中心人物として商業者の側から陸前高田のまちづくりに関わっている方である。

私が小笠原さんにインタビューをお願いしたきっかけは、「高田まちなかビジョン 2024」という資料をインターネット上で見つけたことである。これは、高田まちなか会が、これから 10 年、20 年先を見据えてどのようにまちづくりを進めていくかについてのビジョンを取りまとめたものである。私は、自身の関心である「まちづくり」や「復興」に関するレポートを書くため、まちづくりに携わっている方でインタビューに協力してくれる方を探していた。そして、インターネット上で陸前高田のまちづくりに関係する団体等を調べていた際、高田まちなか会のホームページでこのビジョンを見つけたため、読んでみると、とてもクオリティの高い資料であることに非常に驚き、このビジョンを策定した人たちは本気で陸前高田について考えている人たちに違いないと確信した。そこで、高田まちなかビジョン 2024 を策定した団体の代表にインタビューをしたい！と思い、東京屋カフェのホームページからメールを送らせていただいたところ、快くインタビューを受け入れていただいた。

インタビューは 2024 年 8 月 6 日の 15 時から 17 時に東京屋カフェにて、同行者 1 名と行った。また、陸前高田でのフィールドワーク自体は、2024 年 8 月 5 日から 8 月 8 日の 4 日間であった。また、2024 年 11 月 26 日の 20 時から 21 時に Zoom を使って、1 対 1 で追

加インタビューを行った。

4. 結果

1) 陸前高田へ向かうまで

私たちが陸前高田へフィールドワークに行く前に、大学で 7 回講義があった。それらの講義の受講を通してフィールドワークの計画書を書き上げることが目的であった。私が計画書に書いた問いは、「復興に取り組んでいる人たちは、これからますます街の人口が減っていくという事実、どう向き合っているのか、その事実についてどう考えているのか」というものだった。しかし、なぜその問いの答えを陸前高田に探しに行くのか、なぜこのタイミングでこの問いを立てるのか、といったことに対する答えが見つかっていなかった。それだけではなく、1 章で述べたように、この問いは自身の問題意識の表層の部分であり、その奥に本当に自分が答えを求めている問いがあるような感覚もあった。そのため、計画書として提出した問いがどこかしっくりこなかった。自分がフィールドワークやレポートを通して答えを出したい問いはこれではないのではないかという感覚が、ずっと引っかかって残っており、それはフィールドワーク当日まで続いた。フィールドワークの日を迎え、夜行バス、鈍行電車、JR のバスを乗り継いで陸前高田に向かいながら、ぼんやりと考えていたのは、「私は何が知りたいのだろう」、「なぜ陸前高田へ行くのか？」などといったことだった。

2) 陸前高田に到着して

陸前高田駅に到着し、辺りを見渡した際、綺麗で、新しく、空が広くて、圧迫感のないまちだな、と思った。事前の講義で、中心市街地が 10 メートル嵩上げされていることは知っていたが、私が今立っているのは嵩上げされたところかわからなかった。数分後に先生と合流し、嵩上げされたところのへりへ行き、そこから海と、10m 低い沿岸部を眺めた。その景色の静けさからは、穏やかさや、何も無さ、少しの怖さを感じた。

それから、米沢商会の米沢祐一さんの講話を米沢商会ビルにて聞き、次の日の午前中に東日本大震災津波伝承館を見学、東日本大震災津波復興祈念公園で古谷恵一さんの講話を聞いた。米沢さんは震災当日のご自身の経験をお話ししてくださった。米沢商会ビルという、米沢さんが震災当日に実際に津波から逃れた場所で当日の話を伺い、自分が今、陸前高田に来ていること、陸前高田は 13 年前に被災し、0 からまちづくりがスタートして今の街があることを、その時私は本当の意味で認識した。古谷さんからは沿岸部の震災遺構や陸前高田の象徴である高田松原の回復のための取り組みなどをお話しいただいた。陸前高田に来てからもっとも海に近づいた。海は穏やかだったが、前日に米沢さんのお話を聞いたのもあり、怖いと思った。一度被災した後もその街に住み続けるという選択は自分は怖くてできない

かもしれないと感じた。

もちろん真剣な話の際はピリッとした空気を纏っており、内容は決して明るいだけのものではなかったが、「東日本大震災について語る」という取り組みをしている米沢さんと古谷さんからは、今を楽しんでいるような印象を抱いた。私はもっと、「生き残ってしまった側の責務」というようなものに駆り立てられているのかと勝手に想像していた。しかし、ここでは米沢さんと古谷さんについてだけ述べるが、お二人だけではなく、今回関わらせてもらった人たちの多くにはそのような悲壮感は漂っていなかった。この気づきは私の心にとんと残った。

私は陸前高田には今回のフィールドワークで初めて訪れた。だからまちが復興していく様を現地で体験していない。復興の過程についても、少し予習した程度で、知っているのは予習や映像で見た震災当時の状況と、今回訪れた13年後の街だけだった。この立場の私が、13年目の被災地、陸前高田に訪れ、復興やまちづくりに関してインタビューをすることで、レポートとして残せるものは何だろうか、復興祈念公園を歩きながら改めて考えていた。

上記の講話・見学後から小笠原さんへのインタビューの前までに、アバッセたかたという大型複合商業施設や、アバッセ周辺の商店街、道の駅高田松原、キャピタルホテルなど、陸前高田が復興の道を歩んでいることを感じる施設をいくつも尋ねた。

特に、震災後に嵩上げ地の上に作られたアバッセたかたや JR 陸前高田駅周辺の街並みはとても綺麗で、陸前高田を移動するにつれて、どんどん小笠原さんとのインタビューが楽しみになってきた。高田まちなか会という、私が実際に散策している高田のまちなかをつくっている団体の会長に話が聞けることにワクワクしていた。インタビュー当日、インタビューの時間となったため、七夕まつりの手伝いをしていた場所から、途中でくず餅アイスを食べながら、小笠原さんのお店である東京屋カフェへ向かった。

3) 小笠原さんへのインタビュー

3-1) 小笠原さんの経歴

今回私がインタビューさせていただいた小笠原修さんは、調査の概要でも書いたように、株式会社東京屋社長兼、高田まちなか会2代目会長である。

インタビューでは、小笠原さんの今までの経歴と、小笠原さんが現在会長を務めている高田まちなか会と市で力を合わせて行った復興の道のりについて主にお話を伺った。お話を伺っていて最初に驚いたのは、小笠原さんは昔からまちづくりなどに関わってきたのではなく、一匹狼だった時代があったということだった。お話をさらに聞いていくと、小笠原さんが一匹狼だった頃から事業者団体の代表である高田まちなか会の会長になるまでにとっても沢山の出来事があったことがわかった。

以下、インタビューの抜粋では、「O」が語り手である小笠原さん、インタビュアーとして庄司を「*1」、小川を「*2」とそれぞれ表記した。

○：私、自己紹介します。私は株式会社東京屋、をやってまして、ここのお店、ブティックと生活雑貨、そしてカフェを併設して運営しているということですね。あと、その他に、高田まちなか会の2代目の会長を、昨年から（務めている）。

*1：あ、2代目でいらっしゃるんですね

○：（先代の）会長と共に卒業しようと思ったんですが、その陰謀が崩れた。
（一同笑い）

初めてお会いした小笠原さんはすごく和やかな雰囲気です。話し始めてくれ、ワクワクしていたとはいえ、ガチガチに緊張していた私は小笠原さんのリラックスした雰囲気にとっても助けられた。自己紹介の後は、小笠原さんがまちづくりに関わっていくようになった過程についてお聞きした。

*1：まず1つお聞きしたいのが、この街は結構（・）その（・・）なんですかね、事業者さんというか、行政からのトップダウン式っていうよりは、この元々商店街作ってた方々で、このボトムアップ型で作ってきたのか。

○：うーん（・・）色々複雑です。（中略）で、私も（震災前は）、一匹狼で、あんまり、全然関係なかった。でも、ちょっとだけ、震災前に町に関わっていかなくちゃこれまずいなってことで、まちづくりの勉強しました。っていう感じが前段階。

*1：その、まずいって思ったのは、どういったきっかけで。

○：えーと、私一匹狼で、5店舗で、お店展開し（ていまし）た。岩手県内で。その頃ってやっぱとんがってたので、30代とか。やっぱり陸前高田なんか、みたいな感じの、パターンだったんで、やっぱ（事業者の）みんな怖がって、（・）なんていうかな、ちょっとこう、いろんな理論武装もしてたんで。（・）で、（岩手県の）中心部に行くと、やっぱりそういう人たちがいっぱいいて、すぐやられちゃうんで、やっぱり尖ってないといけなかった。

私は、この話を聞いて2つのことにとても驚いた。まず驚いたのは昔5店舗までお店を拡大していたということだ。次に、一匹狼であったことや、みんなが怖がっていたことに驚いた。なぜなら、今お会いしている小笠原さんの雰囲気や会長という立場と、一匹狼であったことや、みんなが怖がっていたことが全く結び付かなかったからだ。

○：自分の気持ちは違うんだけど鎧被ってた感じだったかな、（それ）が、高田の人たちからは怖いっていうか。

*1：なるほど。

○：（一匹狼）だったね、ちょっと一匹狼的な部分はありました。ただ、一つだけ、消防団に入ってたので、それが唯一、私の、本当のことを知ってた人たちなんですね。その

人たちが守って、私は違うんだよって。そういう前段はあります。

お店を大きくするために鎧を着ていたようだったという小笠原さん。確かに、インタビューの時、私はまだ2日ほどしか陸前高田にいなかったが、陸前高田にのどかな印象を持っていた。そのため、この街からお店を多店舗展開して行って、かつ尖っていたら、街の人が怖がったというのも少し納得がいった。そのような一匹狼だった小笠原さんを理解し、守ってくれたのは、消防団の仲間だったという。

3-2)多店舗展開とまちづくりに関わるまで

小笠原さんの経歴について整理をすると、小笠原さんは陸前高田市出身で、株式会社東京屋は、元々両親が経営していたブティックだった。幼い頃からお店を継ぐつもりでおり、高校生の時点で簿記1級を取得、大学は東京に出て、経営を学んだそうだ。大学に通いながら、夜はカフェ経営の専門学校にも通っていたという。

*1：東京にはいつまで（いましたか）。

O：うんとね、6年くらいじゃない。5、6年。（中略）だから、就職して（・・・）1年くらい働いて、で、親に仮病使われて、もう、やめたら、元気じゃないかって（笑い）もうちょっといたかった。東京でもっと勉強したかった。

*1：でもいつかはこっちに戻ってこようと。

O：はい、もちろんそうです。多店舗化しようと思って、後継ぐってなったら、1店舗じゃなくて、何店舗も、全国展開したかったので、そういう意味での大学の勉強はした。会計学じゃなくて、経営学（中略）それで、昼は大学で、夜間は喫茶店とかカフェの専門学校。大学って結構時間あるからね。アルバイトもできるしね、その間に何やるかって、やっぱり勿体無いんで。（中略）喫茶店っていうか、カフェっていうのはやりたいなって。

元々はブティック・化粧品・生活雑貨店などだけだったが、震災後の建て直しの際に、カフェを併設することができ、夢が叶ったそうだ。

O：（お店を）全国展開しようかなと思ってたので、（5店舗に広げて）岩手県ではトップクラスにはなったんだけど、ナンバーワンと言われたんだけど、その後は、自分の判断。やっぱバブル崩壊があって、（・・・）そこで（事業を）広げるか広げないかっていうところで、もう撤退して1店舗にしようってことで。（中略）（従業員たちは）ちゃんと円満退社っていう形で。しっかり、退職金もしっかり。最後の1日までみんな辞めずに。それが誇り。

*2：そうなんですね。

○：そういう時代を通して、（・）とんがってたの、意外と、超とんがってたの（笑い）それから、（陸前高田駅通りのまちづくりに関わることが）始まったんだけど、この、震災になる前にそういった形で。

*1：帰ってきて。

○：それからみんなと組むようになった。まちづくり教えてもらった。まちづくり教えてもらった人はもう津波に流されてしまった。

それが今の商工会の会長の弟さん。その方も立派な方で、2人とも商工会の会長になっていいぐらいの素晴らしい方。その人にやっぱりまちづくり教えてもらったんで、で、（震災後に）たまたままちづくりのチームに選ばれたので、恩返ししようと思って。っていう流れかな。

*2：なるほど。

○：私の場合、これがまちづくりと店づくりの始まり。

*1：その、まちづくりに関わっていきこうっていうふうに、その（・・・）一匹狼からまちづくりに関わっていきこうってなったタイミングから、少し経った後に震災が起きた（のですか）。

○：そうそう、そうだね、うんと（・・・）2006年。ちょっとね、2006年にちょっと大手、地元の大手のスーパーが潰れた時から、売り上げが、上がってたのが急に下がってきたから、その時にまずいと思って。自分だけとんがっててももう無理だと、いや、自分だけ儲かっても儲かんない、みんなでやないと。

*1：なるほど。そうだったんですね。

○：それから、考えが変わった。5年間ぐらい真面目にまちづくりやろうかな（と思った）。それをすぐわかって受け入れてくれたのは、その（現陸前高田商工会の会長の）弟さんが私のことを、とんがってたんだけど。わかってくれてた。その人は消防団（の上司）だった。その人が、（小笠原さんのことを）いいように、で、逆に私の、うまく経験も響いてくれて、役員に推薦してくれて。

これが、小笠原さんがお店を多店舗化し、一匹狼だった頃から、まちづくりに関わるようになっていった経緯だった。ここまで話を聞いて、小笠原さんはやると決めたらしっかりやる人、本気で取り組む人なのかなという印象を抱いていた。また、まちづくりに関わるようになったときに、手引きをしてくれたのは、消防団で同僚だった方だった。小笠原さんと消防団については、初回のインタビューで深く聞くことができなかったため、後日 Zoom で追加のインタビューをさせていただいた時に詳しくお聞きした。

3-3)小笠原さんと消防団

追加のインタビューで小笠原さんに、消防団のことについて伺った。すると、消防団に入る頃の、消防団に対する思いは、当時の小笠原さんの、地元である陸前高田に対する思いや

考え方と非常に共通しているのかなと感じた。消防団に入ったきっかけは、ある日家に帰ったら消防団の半纏が家の玄関にあったことだそうだ。小笠原さんは当時東京から戻ってきたばかりで、嫌だなと思ったが、地元に戻ってきたからには至少くらい地元で貢献できたらいいなという思いもあり、消防団に入ったという。また、そこには親の存在もあったという。

○：最初はね、入りたくなかったんだけど。親がよそ者で、宮城県出身なので、やっぱりそこで、嫌がらせじゃないけども、消防団とかには入れなかった。っていうのが親にはあって。(中略)それで、(小笠原さんが消防団に入るのを)認めてくれたってことがね、うちの父は喜んでたのね。やっぱり。

*1：なるほど。

○：認められたっていう自分の方と(比べて)。これで、陸前高田の、なんていうか、(地元の)人間だっていうのをね。息子が入ったことによって実感したって部分では、親孝行にもなったかな。

最初は消防団に入ることに必ずしも積極的ではなかった小笠原さん。しかし結果的には、前述したように、一匹狼だった頃の小笠原さんを守り、そしてまちづくりに関わるように取り持ってくれたのは消防団の仲間だった。

○：まちづくりをしなきゃいけないなって思い始めた時に、商店街の理事長さんが、私のことを、(その方は)消防団のちょっと上司だったんだけど、(中略)うまく私をね、みんな私を怖がってる人ばかりなんで、一匹狼だったから、(中略)でも、うまく引き入れてくれて。

そのようにして2006年頃から小笠原さんはまちづくりに関わり始め、最終的には商店組合の専務理事まで務めた。このような流れから始まり、そこから震災後、陸前高田のまちづくりの中心人物となっていったということだった。

3-4)被災から

小笠原さんが陸前高田のまちづくりに関わり始めて数年が経った2011年3月11日、東日本大震災が発生、陸前高田の街は甚大な被害を受けた。小笠原さんは、震災発生当時は消防団を辞めていたが、消防団の経験もあったためすぐに避難し、無事だった。ただ、当日のことについてお話を伺った際、生き残った人は皆、避難意識が強かったから生き残ったのではなく、奇跡だとおっしゃっていたのが印象深かった。自然災害は、だれかれ構わず人間の生活を呑み込む。そういった圧倒的な存在なのだというのを肌で感じた。中学校に避難した小笠原さんは、被災した直後の街を見るのが怖く、1週間経ってから初めて見たという。

*1：一面に、その、荒れた街を見た時の第一印象ってどんなものでしたか。

O：第一印象は(・・)戦争、映画で見るような、焼け野原の(・・・)あの、悲惨とかじゃない、凄惨という感じ。凄惨だって感じ。の、イメージはありました。

悲惨ではなく、凄惨。その場にいなかった私には想像することも難しい光景なのだろうと感じた。当時の写真の多くもヘリコプターから見下ろす形でのものだった。その街をより地面から近い目線で目の当たりにすること。そしてそれが自分の生まれ育った街だということ。東日本大震災で被災した方は、皆その経験をしている。そういった歴史を忘れてはならない、無視してはならないと改めて思った。そして、被災した方たちがもう一度立ち上がったことによって、今、自分が立っている陸前高田の街があるのだと改めて認識した。

災害大国である日本。2024年1月1日には能登半島でも大きな地震が起きた。次にいつどこでどのくらいの規模の災害が発生するかはわからないが、発生することは間違いないのだろうと思う。小笠原さんから、発生してしまった災害の経験を次に活かし、発生を防ぐことはできない自然災害への対策やその後の対応をより良いものにしていくことが、せめて私たち人間にできることなのだとということを学んだ。例えば、阪神淡路大震災の時には仮設商店を開くのには自腹でプレハブを立てなければならなかったが、その反省を生かし東日本大震災の後では国が費用を負担しプレハブを建てることができたという。加えて、小笠原さんは、東日本大震災で被災した事業者に対する国と県からの補助制度であるグループ補助金の、陸前高田一带の代表を務めており、現場から見たその制度の問題点等に関してはしっかりと発信をしていくとおっしゃっていた。自然災害は圧倒的なものであり、昔から私に無力感を抱かせていた。しかし、ただ無力感を覚えて終わりではなく、実際に起きてしまった自然災害から学び、将来に備えることは私たちにもできるというメッセージを、私は小笠原さんから受け取った。

3-5)まちづくり

今回のインタビューで最も多くの時間を割いてお話を伺ったのがまちづくりやその過程についてだった。聞いたかったことは2つあった。1つ目が、どのようにまちがつくられていったのかという過程についてだった。もう1つが、前述したように、まちづくりを行う人の思いや動機についてだった。映像で見た被災直後の陸前高田から、フィールドワークの際に自分の足で歩いた陸前高田のまちができるまでについて、小笠原さんに伺った。

(震災からの復興をこれから進めていく、という時期の話についてお聞きしている)

*1：まちづくりに関わってた人たち(市役所職員、事業者等)の、その、モチベーションというか、動機みたいなところっていうのは。

O：まちをよくしたいと思う人たちが(・・)なんていうの、単純に。単純に街を、これからまちをよくしていきたいっていう人が集まってるんだから、動機じゃなくて、なん

というか（・）

*1：疑うところじゃない

○：うん、そんなことする必要はないと思います。

*2：疑う隙もないような（・）

○：もう、疑わないな。そんなこと。言葉すらないと思います。なので私、1 番今でもみんなに言ってんだけど、重い会議した後になんで飲み会が（あるんだ）。2 時間くらい重い会議したのに、3 時間くらい飲み会。必ず。市役所の人とかも全部。そこでまた同じことを話して。熱く。

小笠原さんがまちづくりについて語るとき、必ずと言っていいほど、最後には市役所の方、商業者の方、UR の方など、様々な「チーム高田」の人たちとともに街をつくっていったということを強調していたのが非常に印象的だった。一つ一つ興味を惹かれるエピソードをたくさんお話しいただいた。たとえば、まちづくりの方向性を決めていく会議に、市役所から各部の部課長が参加していたという話を聞いた。部課長クラスの、決定権を持った人が出席しているということは、会議で出た案に対してその場で実行するかしないか、採用するかしないかを定めることができるということである。そのため、小笠原さんも、市役所の人たちがいかにまちづくりに本気なのかが改めてわかったとおっしゃっていた。復興時からの継続で今があるということを、複数回、強調されていた。

○：飲み始めてから 1 年くらいで、お互い信頼関係ができ始めて、（中略）だから逆に遠慮しない。お互いに、例えば遠慮して無理してやるんじゃなくて、これはダメだよとか逆に言われたり。（中略）そういう形の関係が築けたっていうのは、今でも築いてるっていうのは、その継続が今だっていうことだけは、言っておきたいな。だから、そういう意味では、（中略）12 年間ずっと一緒にやってきたっていうのが大きい。単純に今が（・・・）いきなりポンっと、ビジョン（を作った）とかじゃない。

*1：まちづくりを全体で進めていく中で、小笠原さん個人の考えだったり意見と、その、全体の流れというか、多数意見と、考えがぶつかったことっていうのはありましたか？

○：それは、ない、ない。ぶつかったことはない。（みんな）つまんない意見出さないって、まずみんな勉強してやってきてるんで、（中略）筋違いなことは私も、みんな、言わなくて、話して、とにかく真剣に話してる中で、そういうことはない。なかったかな。みんな。それくらい高度な話を（していた）。

（小笠原さんたち商業者の要求に対して市役所職員が工夫して応えてくれたエピソードを踏まえて）

○：やっぱり、そういう意味では、（最初から）「できない」は言わない人たち、その場で

決めるような人たちが市役所にもいたってことは、結構意識の高い人たちが揃っていたという部分はあったのかな。

私自身、フィールドワークの前からまちづくりに興味があり、将来の進路も、まちづくりに関わる仕事がしたいと考えていた。インタビューでは、まちづくりは1人でできるものではないこと、協働する仲間、チームの中での信頼関係の構築が欠かせないことを小笠原さんの実体験から教えていただいた。そんな、文字通り0からと言っていいほどのところから始めたまちづくりをしてきた小笠原さんからは、現在の陸前高田はどのように映っているのかが気になり、伺った。

*1: 率直に今この、パッと、この13年経った街を見て、どういうふうに、どういうふうな印象を持ちますか。

O: うんとね、思った以上に綺麗にできたんで(・)ってというのは思います。自分のイメージ以上に。それは、みんなで一生懸命考えたから、の現れなの。これ。偶然じゃなくて必然、必然だな。あのぐらい考えたらこんなふうに、上出来、もう120点、200点満点のものができるんだなーってというのは、(思う)。で、後これ、今度こんな立派になりすぎたんで、今度はこれをどう維持していくか。そこ考えなきゃいけないね。だから、そこ。立派だから終わりじゃないので、そこはまた、楽しい。とても楽しい。(・・)まちづくりは面白いですよ。

*1: あ、楽しいですか。

O: 楽しいですよ。

*2: すごく伝わってくる。

私の質問に対する小笠原さんの返答は、非常に小笠原さんの人となりが見えてくるものだと感じた。まず、綺麗な街ができたのは必然であるという言葉に表れているのは、まちづくりをしてきた仲間たちへの厚い信頼である。前述のように、インタビュー中には、いかにまちづくりに関わってきた人たちが凄かったかというお話を何度も伺った。次に表れているのは、今の街が綺麗にできていることにただ満足するのではなく、すぐに、次どうするか、これからどうするかについて考えている姿勢だ。私が小笠原さんにインタビューを依頼するきっかけとなった「高田まちなかビジョン2024」も、ここまでまちづくりをがむしゃらに進めてきたが、一度立ち止まってこれからどうしていくかのグランドデザインをしようという目的で策定されたものだとも伺った。そして最後に表れているのが、まだまちづくりは終わらないということに対して、楽しい、と言い、かつ本当に、心から楽しそうな表情を見せていたポジティブさだ。2つ目に挙げた、次どうするかについて考えている姿勢とも通ずるが、小笠原さんのインタビューで常に関心されたのはポジティブさであった。これらの小笠原さんの人となりは、小笠原さんの経験から少し離れ、自分が聞きたいことを聞いた際の

答えにも非常に強く表れていた。

3-6)リーダーとしての小笠原さん

元一匹狼だった小笠原さんが、今では、高田まちなか会の2代目会長となり、かつ、東日本大震災被災への支援として国や県から受けているグループ補助金のグループ代表となっている。しかし、周りの人からの小笠原さんへの信頼は自然発生的なものではなく、小笠原さんの努力の結果であることが、インタビューを通してわかった。

(まちづくりの計画段階で、商業者の方の声を聞くため、商業者を集めて勉強会を行っていた。)

O:でもそのとき、一匹狼だった私が中心になってたりすると、なんでお前がって(・・)と思ってたと思います。そんな感じの空気を感じたんで、とにかく一生懸命背中を見せる、やっているとこを見せて、もうわかってもらおうと思って、とにかくひたすら必死になって、こう、みんなにこう話しかけたりして(・・)やったら、グループ補助金の代表になって。それで、ようやくこう(・・)信頼してもらって。

*1,2:うーん

O:本当に(・・)こう(・)信頼してよって感じ(笑)。もう大丈夫だから、一匹狼じゃないから、と思って、でも一匹狼じゃないとは言えないから、頑張ってまちの人にも声かけて、結構苦労したんだから、そういう意味では。でも私もまさか会長までやるとは(思わなかった)。(中略)やっぱりね、やっぱ、うん、自分のことだけ考えてちゃダメだなと思ったとかっていうのはあります。

小笠原さんは、周りの人の信頼を得るために、背中を見せること、姿勢を見せることを重視していた。その、背中で示すリーダー像を体現しているエピソードがあった。

(小笠原さんは現在、会長として、個店ごとのスキルアップが、店が続いていく上で欠かせないという考えを持ち、商業者の方達に呼びかけていた。)

O:で、お店、お店(東京屋)やってるんだけど、やっぱり大事なのは(自分のお店も)ちゃんと結果出すってことかな。お店でも。でないと商業者もついてこない。だから、結構一生懸命必死になってるんだけど。やっぱりこう、お店をやっても、口だけじゃなくて自分のお店も輝いて。個人、個店のスキルアップって言ってるから、お前の店どうなんだよって言われないような感じで(意識して行動している)。(中略)やっぱりお手本になるようなことをしっかりしとかなないと、みんなついてきてくれないので、やっぱり結果を出す。出しながらやって(・・)なのでうちの、飲食店部門(東京屋カフェ)に関しては、(開業してから)7年経つけども、増収増益。コロナ関係なく。飲食店だけでは一円も落としたことない。

このように、背中を見せ、結果を出すことで信頼を得ていったそう。ただこれは、当然だが口で言う程簡単なことではない。リーダーとして信頼されていくには背中では示さなければならないと考え、そして結果を出す努力をし、実際に結果を出し続ける。そして信頼を得ていく。この一連の流れを実現できることの凄さは今の私には計り知れないものだった。

そうして得た信頼が、形となって表れたことがあった。まちづくりが本格的に始まる前、つまりまちづくりの中心的存在に小笠原さんになる前、小笠原さんが仮設商店街にてお店を開店した際、お祝いの花束は3、4個だったそう。そしてまちづくりの道のりを経て、街ができ、東京屋のお店ができた時、届いた花束は、なんと100個以上だったそう。数十倍の数である。この花束の数は、さまざまな人からの小笠原さんに対する信頼が形として表れたものであり、つまり小笠原さんの取り組みが花束という形で可視化されたものだとは私は思った。

3-7)小笠原さんのインタビューを通しての感想

小笠原さんへのインタビューを終えて、私は3つの姿勢を小笠原さんに見た。1つ目は、ポジティブさである。小笠原さんは自他ともに認めるポジティブな方だった。50年間剣道をやっているそうで、その経験から身についたポジティブさは、小笠原さんの基盤となる考え方であるというふうに感じた。

2つ目は、現状を悲観するのではなく、自分ができを考える姿勢である。まず何よりも、被災後、目の前の現状をただ悲観するのではなく、まちづくりを進めていったことからその姿勢が読み取れる。他にも、人口減少に無力感を覚える、といった私の発言に対して、商業者としてできるのは賑わいの創出と交流人口を増やすことだから、どうやってそれらが生まれるかということを考えている、と答えたり、陸前高田の駅前に東京屋カフェを含めてカフェが多いことについて、競合が多いと嘆くのではなく、カフェ同士で手を組んで、この街をカフェの街にしよう、という発想に至ったりしていらっしゃった。挙げたらキリが無いほど、小笠原さんのお話からは、自分ができるとは何か、ということを考え、行動に移しているエピソードが沢山あった。

3つ目は、結果を出すまで諦めずやり続けるという姿勢である。小笠原さん含めまちづくりに関わった人たちのその姿勢が、現在の陸前高田の街をつくったのだということがインタビューを通し身に沁みてわかった。6節で、コロナ禍でも増収増益だったという話があったが、その際にも、売り上げをどう伸ばすかを戦略的に考え、そして諦めずに続けたとおっしゃっていた。

O：やっぱり諦めないってことが大事なんで、(中略)絶対諦めちゃいけない。諦めることがかすったりしただけでもダメなんで、絶対諦めないっていう信念を持ってやんないと、ダメだよ。まちづくりもそうだね。だから、そういう覚悟持ってやってるから、

みんな真剣にやるんだよね。

この、ポジティブさ、自分にできることを考えて実行する姿勢、結果を出すまで諦めない姿勢は、私には無いものだった。だからこそ、小笠原さんのこの姿勢が印象的だったのかもしれない。ここに、私は陸前高田で何を問い、何を知りたいのか、というフィールドワークをする前から、フィールドワーク中、フィールドワーク後まで一貫して自分の中で自問自答していたもののヒントがあるのではないかと、そう思った。

4) フィールドワークとインタビューを終えて

4-1) 気付きと七夕まつり

インタビューを通し、私の予想と異なり、ポジティブな言葉が多かったことが驚きだった。さらに振り返ると、フィールドワークで講話をしていただいた方々も、仕事や講話を含め、自分の取り組みをすることは楽しいとおっしゃっていたことに気がついた。私はフィールドワークに行き、陸前高田の方と交流するまで、震災に関する活動をしている人は全員、「震災から生き残ってしまった」という、亡くなってしまった方に対する罪悪感や、「生き残った私がやらなければならない」という使命感、責務などが原動力となっているのかと勝手に想像していた。そしてそこには楽しさなどといったポジティブさはあまりないものだと思っていた。そのため、今回お話を聞いた方々の言う「楽しい」という言葉、感情は、私の中ですんなりと受け入れられるものではなかった。私は自分の中でどこにその言葉を分類すれば良いのかわからなかったため、とりあえず、というように心の中の適当なところに置いておいたという感覚だった。その言葉は様々なタイミングで私の中で存在を主張してきた。

その、「楽しい」という感情の顕著な表れは、七夕まつりであった。フィールドワーク中の8月7日、陸前高田で七夕まつりが開催された。私たちは前日から少しか準備のお手伝いをさせていただき、当日も山車を曳いた。そこには祭りや山車を中心とした熱狂があり、陸前高田という街が持つ力強さや陸前高田に住むことを選んだ住民の方々の郷土愛を、私は全身で感じていた。一度は全てが津波に飲み込まれた街。その街で暮らし続けるために10メートル以上の盛り土を行うことを決定し、そしてその盛り土の上に街をつくり、その街が会場となって、震災によって途絶えてもおかしくなかった七夕まつりが私の目の前で行われていた。綺麗な街、伝統の七夕まつり、そしてその街に住んでいる人、遊びに来る人。陸前高田とはなんてすごい街なのだと暖かい気持ちに包まれた。陸前高田に来てよかった。私は心からそう思った。ここからは、フィールドワークの間に会った、小笠原さんを始めとする沢山の方々との関わり、フィールドワークで得た様々な経験、それらを踏まえて、問いの再検討を行い、フィールドワークのまとめをしていく。

4-2) 問いの再検討

3泊4日の陸前高田でのフィールドワークと、小笠原さんへのインタビューを終えて、私は改めてフィールドワークに行く前に立てていた問いを見返した。問いは、「復興に取り組んでいる人たちは、これからますます街の人口が減っていくという事実、どう向き合っているのか、その事実についてどう考えているのか」というものである。フィールドワークから帰ってきた後に見返しても、やはり私はこの問いにじっくりこなかった。私が陸前高田に行って感じた感情や得た経験は、この問いに答えるものではなかった。何か、より私の知りたいことを適切に述べ、かつ、現地でのフィールドワークやインタビューから得たものが答えのヒントとなっている問いがあると感じていた。本当の問いを見つけるには、①陸前高田で何を学んだのか、と、②自分自身がどんな状態で、何を求めて陸前高田に行ったのか、の2つを明らかにしていく必要がある。

そこでまずは、①の問いに、今回の経験をもとに答えを出すならどのような答えになるだろうと考えた。すると、「復興＝まちづくりに取り組んでいる小笠原さんは、街の人口が減っていくという事実に対して、自分にできることは何かを考え、ポジティブな精神で取り組んでいた」というふうになった。

ここで、1つ疑問が生じた。「自分にできることは何かを考え、ポジティブな精神で取り組むこと」は「人口減少と向き合うこと」なのか？というものである。デジタル大辞泉によると、向き合うとは「互いに正面を見て対する」ことである。それでは、小笠原さんは人口減少に向き合っていたのだろうか、そうではないと私は感じた。小笠原さんが向き合っているのは、目の前のことや未来であって、人口減少と向き合っているのではないのではないか。ここでの人口減少を、広く「困難」の一つだと捉えると、東日本大震災も困難の一つとして浮かび上がってくる。小笠原さんは、人口減少や震災といった困難に対し向き合うのではなく、それらを受け止めつつ、自分にできることは何かというところに目線を向けていると言える。ここまでの話を一文で整理する。

小笠原さんは、東日本大震災や人口減少といった困難に直面した/しているが、その困難に対して足を止めて向き合うのではなく、それらの困難を受け止めつつも目の前のことや未来と向き合い、自分にできることに目線を向けている。

これが、私が陸前高田で学んだことだった。この一文と対比して、問いを立てた際の自分を整理すると、

私は、自然災害や人口減少といった自分にはどうしようもない困難の存在に直面し、そのことに対して無力感を感じ、足が止まっていた。自分にできることがあるのかもわからず、目線も困難に釘付けとなっていた。

となる。これで、陸前高田で私が学んだことである小笠原さんの姿勢と、問いを立てた際

の自分の姿勢について整理された。最後に、もう一度受講の経緯を見返してみる。「私にとって、震災から 13 年経った東北の現在を見ることも、能登の現在を見て能登の未来を考えることもどちらも、私の故郷にいずれ訪れる可能性のある未来を考えるということだった」。そうだ。そもそも私が自然災害や人口減少に関心が向いたのも、上記で整理したような姿勢であったのも、私が静岡県裾野市出身であることがきっかけだった。そして私は、陸前高田に、能登や、未来の被災地（≡自分の故郷）の未来を考えるため行ったのであった。これで、本当の問いを言語化する準備が整った。

4-3) 私の問いたかった問いとその答え

これまでの議論を踏まえ、私の問いたかった問いを改めて言語化する。このフィールドワークの本当の問いは、「13 年後の被災地である陸前高田では、東日本大震災や人口減少といった困難とどのように向き合いまちづくりをしているのか?」という問いであった。これこそが、私の問いたかった問いであった。そしてこの問いに対する答えは、「小笠原さんは、東日本大震災や人口減少といった困難に直面した/しているが、その困難に対して足を止めて向き合うのではなく、それらの困難を受け止めつつも目の前のことや未来と向き合い、自分にできることに目線を向けている」という、前節で整理した小笠原さんの姿勢そのものであった。

無力感に襲われ厭世的な思いが強かった自分に、小笠原さんは、諦めないこと、思考放棄しないこと、できることを考えること、目の前のことを一生懸命やること、ポジティブでいることを教えてくれた。これまでの生き様と姿勢でそれらの大切さを示してくれた。このことは私にとってかけがえのない財産となった。

確かに、自分の考え方が変わったところで、現実是不変である。日本にはいつ巨大な自然災害が発生してもおかしくないし、人口減少も止まる見込みはあまりない。それでも、どんな考え方であるにせよ同じ現実を生きるしかないのなら、自分のできることを諦めずにやり続けよう。陸前高田へのフィールドワークと、小笠原さんへのインタビュー、レポートにまとめる作業を経て、私は素直にそう思っている。

小笠原さんとの関わりはこれで終わりとなるのではなく、これからも関係を持ち続けたいと、勝手ながら思っている。インタビューの際、私が人口減少に対する無力感を話すと、小笠原さんは、商業者である自分たちができることとして、賑わいの創出、交流人口の創出を挙げていた。そこで、まずは私がこれからも陸前高田に遊びに行き、交流人口の一員となろうと思う。七夕まつりは毎年参加したいほど楽しかったし、冬の陸前高田、春の陸前高田もまた変わった顔を見せるのだろう。そして陸前高田を訪れるたびに、私は陸前高田の姿勢からその時々の中にある問いに対する答えのヒントを得るのだろう。

参考文献

佐藤滋（編）（2011）. 東日本大震災からの復興まちづくり. 大月書店
デジタル大辞泉 . 「『向き合う』の意味や使い方 わかりやすく解説 Weblio 辞書」 . Weblio
辞書.
<https://www.weblio.jp/content/%E5%90%91%E3%81%8D%E5%90%88%E3%81%86> . (2024/12/20 確認)